

| | |
|---------|---------------------------|
| 氏名(本籍) | くわ はら のり こ 桑原規子(兵庫県) |
| 学位の種類 | 博士(芸術学) |
| 学位記番号 | 博甲第2980号 |
| 学位授与年月日 | 平成14年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 審査研究科 | 芸術学研究科 |
| 学位論文題目 | 恩地孝四郎研究 —版画における近代性の追求— |
| 主査 | 筑波大学助教授 博士(芸術学) 五十殿 利治 |
| 副査 | 筑波大学教授 Dr. Phil 中山 典夫 |
| 副査 | 筑波大学助教授 博士(芸術学) 守屋 正彦 |
| 副査 | 筑波大学元教授 藤井 久栄 |

論文の内容の要旨

恩地孝四郎(1891-1955)は日本近代版画史上、明治末年から始まる創作版画運動において大正初期に頭角を現し、それ以後、戦後に至るまで指導的な地位にあって、版画界をリードした作家である。その芸術活動は、一方では「マイナー・アート」とされる版画の社会的認知を要求し、他方で芸術表現の先端を走るという際だったものであった。とくに恩地は大正期にはいって盛んに紹介された西欧の近代美術の新傾向に関心を払い、積極的に摂取し、消化することに努めることになったが、そのことによって、日本における最初の抽象表現を試みた作家として評価されることになった。以後、さまざまな模索を続けながらも、その表現を着実に深化させたことによって、日本近代版画史を築いたといえる。

とはいえ、恩地の活動は版画に限定されてはいなかった。そのジャンルは多方面にわたっている。油彩、詩、評論、グラフィック・デザイン、写真などであるが、そのことによって、恩地芸術は自ずと脱領域的なものとなり、それ自体として日本の近代美術史にまれな足跡を残すこととなった。

本論文は恩地孝四郎の版画を、近代版画史の流れの上で論じるとともに、その外部へ大きく踏み出していた恩地の足跡をも考察対象として、全体的な検証を目指したものである。具体的には、二つの目的が設定されている。一つは、いうところの「近代性」の実体を吟味することであり、いま一つは、恩地が「版画」という表現手段を選択した理由とその意義を明らかにすることである。その狙いは、恩地の戦前期における版画芸術の意義を解明すると同時に、両大戦間の日本の近代美術全体における近代性追求の一端を明らかにすることにある。

本論文は序章のほか、全8章と結章から成る。付録として年譜、参考文献一覧、そして図版が添えられている。序章においては、「近代性」というテーマを、「前衛(アヴァンギャルド)」と「近代主義(モダニズム)」の両概念の比較において、規定して、前述の本論文の目的について確認したあと、先行研究を紹介し、その問題点を洗いだした。ついで、考察対象を、恩地による主要な連作<抒情><人体考察><楽曲による抒情><ポエム>を中心に、これと不可分な油彩画制作や「出版創作」をも加えると設定し、年代的にも1910年代初頭から1945年までとした上で、方法としては、まず恩地版画についてのデータを整理し、さらに新興美術運動との関係、西洋美術受容の問題、創作版画運動との関わり、諸芸術との交流の問題、を主要な観点として、作品の背景を探ることとしている。

第1章『月映』と1910年代の『抒情』では、恩地孝四郎が版画界に登場する契機となった版画同人誌『月映』

と月映社の活動の時代について考察している。とくに、同誌に発表された〈抒情〉の連作について、まず1910年代の洋画界の状況を見渡した上で、命名の由来、画風の変遷、その思想、など基本的な事項を整理している。

第2章『抒情』の周辺』では、当時人気を博していた竹久夢二、山田耕筰や三木露風による未来社、さらに萩原朔太郎と室生犀星による感情詩社をそれぞれ取り上げて、恩地との関係を考察した上で、さらにカンディンスキーの芸術論、ベルクソンの生命論などにも着目して、同時代の美術、音楽、文学がどのように〈抒情〉の連作に関わるのかを検討している。

第3章「恩地孝四郎の油彩」では、1914年から24年まで制作し、二科展や円鳥会などに出品した恩地孝四郎の油彩画を取り上げる。一時的に版画の発表場所を失ったときに試みた大芸術としての油彩への取り組みには、白樺派、とくに武者小路実篤の主観主義や人道主義の影響が見られるが、これを考察することで、油彩画家としての恩地の存在を確認するとともに、半面で、より抽象的な表現を求める恩地の版画観がより鮮明になる。

第4章「〈人体考察〉シリーズ」では、関東大震災によって大きく恩地の芸術観が動揺した結果、「抒情画」に代わり制作された「考察画」としての〈人体考察〉について、とくに、その「考察」ないし「考察画」という概念に着目して論じる。さらに、同時代の新興美術運動、西欧の立体派や未来派の受容、また具象版画が優先される帝展出品との絡みから、抽象を追求する作品の内容を分析している。

第5章「恩地孝四郎の帝展出品作めぐって」は、創作版画を掲げて活動してきた恩地が、1927年第8回帝展から版画の出品が認められ、日本創作版画協会の代表として出品を続けたとき、〈人体考察〉の抽象ではなく、具象版画を提出した問題を、帝展受理をめぐる当時の版画界の状況と関係づけて論じている。また、恩地は帝展落選も経験しており、その後の出品状況についても考察を加えている。

第6章「〈楽曲による抒情〉シリーズ」は、帝展出品を中止して、1910年代の〈抒情〉を再開した際の連作について考察する。恩地は諸芸術のジャンルを超えた「交流芸術」を目指して、音楽からの感動をモチーフとした〈楽曲による抒情〉の連作を開始した。当時の総合芸術論について、音楽家の諸井三郎、石川義一、山田耕筰との交友、さらに新造形主義や音楽派など西欧の新傾向の絵画観などから、検討を加える。

第7章「二つの『出版創作』」は〈楽曲による抒情〉と同時期に制作された詩画集二冊『海の童話』と『飛行官能』を論じる。いずれも1934年に版画荘から出版され、恩地自ら「出版創作」と呼んだように、細部にいたるまで彼が関わった芸術作品ということが出来る。「円本」時代によって始まる大量の出版ものが出回る大衆化社会における芸術のあり方の模索と位置づけられる。銀座の「版画専門の店」版画荘の活動についても併せて検討を加える。

第8章『『ポエム』シリーズと肖像版画』では、1930年代後半からの抽象と具象と大きく傾向を異にするふたつの系列、自然界の小生物をモチーフとした〈ポエム〉連作と萩原朔太郎らをモデルとした肖像版画を検討する。両者は「心象画」として共通点があるが、とくに〈ポエム〉は詩と画を最終的に合一された連作と規定される。肖像画家としての、そして木版にも手を染めた安井曾太郎の存在、あるいは新興写真によるポートレートなどの背景を考察している。

結章においては、各章の考察内容をまとめた上で、恩地孝四郎の版画における「近代性」の追求について総括している。まずそれが強烈な自我意識の発露であり、その背景には多様な芸術家たちの交友が糧となり、「抒情画」への跳躍台となったこと、また紆余曲折があるにせよ「抒情画」を戦後まで追い求め、その姿勢を貫いたこと。第二に、「抽象」という新しい表現形式の探究が、西欧の新傾向を受容させる一方で、「カメレオン」と自称するような変転する側面をもたらしたこと、その点で恩地芸術は「前衛」というよりも「モダニズム」と規定されること。第三として、恩地が版画という形式を近代的なものとして捉えたことである。創作版画という未開拓の自由な表現、油彩とは異なる発表形式、複数制作、諸芸術との容易な交流に可能性を見出したのである。第四として、恩地が多彩なジャンルを手がけて、旺盛な活動を展開し、そうした全体的な視野のなかで、美術の向かうべき方向を冷静に割り出したことであると結論づけている。

最後に、恩地孝四郎の戦時下の活動、また戦後の問題を今後の課題として挙げ、擱筆している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

近代日本における版画史は、小野忠重の先駆的な仕事『近代日本の版画』に続く通史の試みが待望されている領域である。一方に、伝統的な版画、とくに木版畫の流れがあり、他方に、西洋文化の移入にともない新たに編制された美術観に基づく版画、とくに明治末年に始まる創作版畫の流れがあり、その両者の展開を考慮に入れつつ、通史的な展望を示す研究が待ち望まれる。

そのような近代日本の版画史において、大正初年から戦後に至るまで版畫家として一貫した姿勢を貫き、社会的な責任にも配慮して、版畫の地位向上に努める一方で、西欧をはじめとする同時代藝術の潮流の先端とも接触を失わなかった恩地孝四郎の存在は特筆すべきものである。すなわち、恩地藝術の研究は日本近代版畫史には不可欠の一章をなすものといえる。恩地の研究はそのまま版畫史研究につながる側面があるのである。

著者は修士論文以来、長年にわたり恩地孝四郎研究に携わってきている。本論文においては、その着実な調査研究の蓄積が随所に活用されている。恩地の未公刊研究ノートを典拠とする記述、多数にのぼる版畫作品の比較同定作業、その出品歴や所蔵歴の確認作業というような実証的・基礎的な研究によって、恩地の主要な連作の概容について、先行研究を尊重しつつ、基本データが示されている。美術史的研究に必須の土台が整備されたともいえよう。それは版畫作品だけに限られない。たとえば、『飛行官能』について、製本ミスにより、本の構成そのものが恩地の意図とは少しく異なっているという著者の指摘は、それ自体として作品研究に大きな貢献を果たすものである。版畫研究と不可分な油彩についても基礎的な調査を行っている点も見逃せない。

本論文はまた版畫史という枠組みを超えた恩地孝四郎の活動の足跡を丁寧掘り起こしている。それは多岐にわたる文芸の領域を包括するものであり、恩地の幅広い交友圏が創作の重要な糧ともなっていることを意味している。美術家は別として、本論文で論及されている芸術家ないし芸術家集団は武者小路実篤、未来社、三木露風、山田耕筰、感情詩社、萩原朔太郎、北原白秋、諸井三郎、石川義一など、文学関係と音楽関係が中心であるが、こうして列挙するだけでも恩地藝術の奥行がいかに奥深いものであるかが理解できる。著者はそれぞれ設定した課題において、これらの人々と恩地との交流について正面からアプローチを行っている。抽象表現を追求する一方、このようにして「交流芸術」や総合芸術を志向した恩地の藝術観が具体的に示されている点は評価に値しよう。

1930年代は、まだ近代美術史の研究が進んでいない未開拓の領域であるが、著者はここでも恩地藝術の問題点を押さえている。対社会的な存在としての恩地、さらにこれとは別個に自己表現を追求する恩地を想定して、表現者としての自己を貫く姿を浮彫にする一方で、抽象表現のみならず、この時代の肖像版畫に安井曾太郎の肖像画や木村伊兵衛の新興写真など、同時代に台頭した藝術潮流の反映があることを丹念に記述している。

本論文は、著者自らが断っているように、戦時下での活動、とくに公的な役割を担った点などについては、考察が十分に及んでいない点が認められるが、しかし、全体としては新知見に満ちた、独自の考察を加えた論文として高く評価できるものである。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。